

R Y U K O K U U N I V E R S I T Y

THE LAW DEPARTMENT




ALUMNI ASSOCIATION

THE 20th ANNIVERSARY

$\frac{20}{350}$
の
可能性

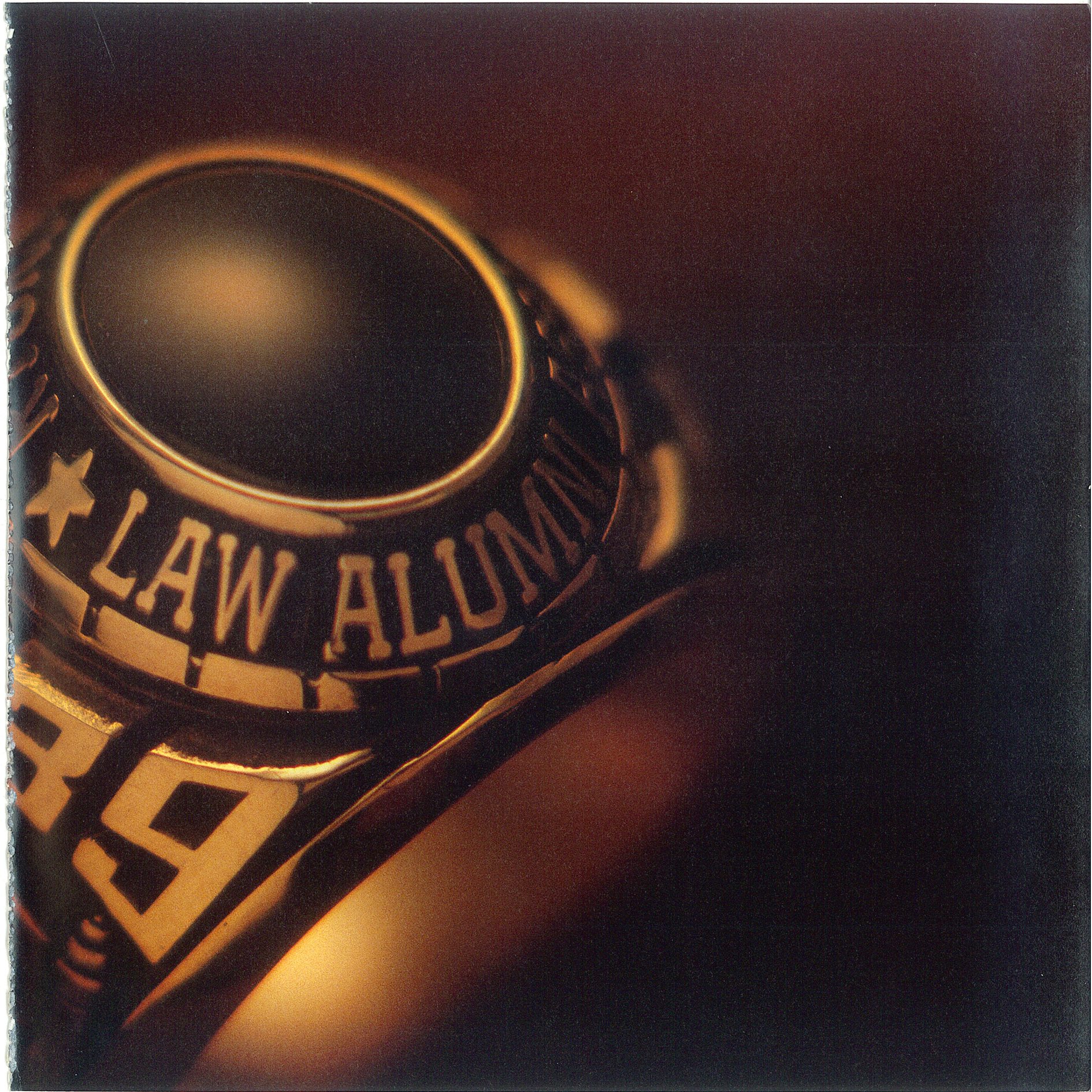
龍谷大学法学部同窓会
20周年記念誌



1968年開設以来、350有余年の歴史を誇る龍谷イズムを礎石に、一時代を築いてきた龍谷大学法学部。

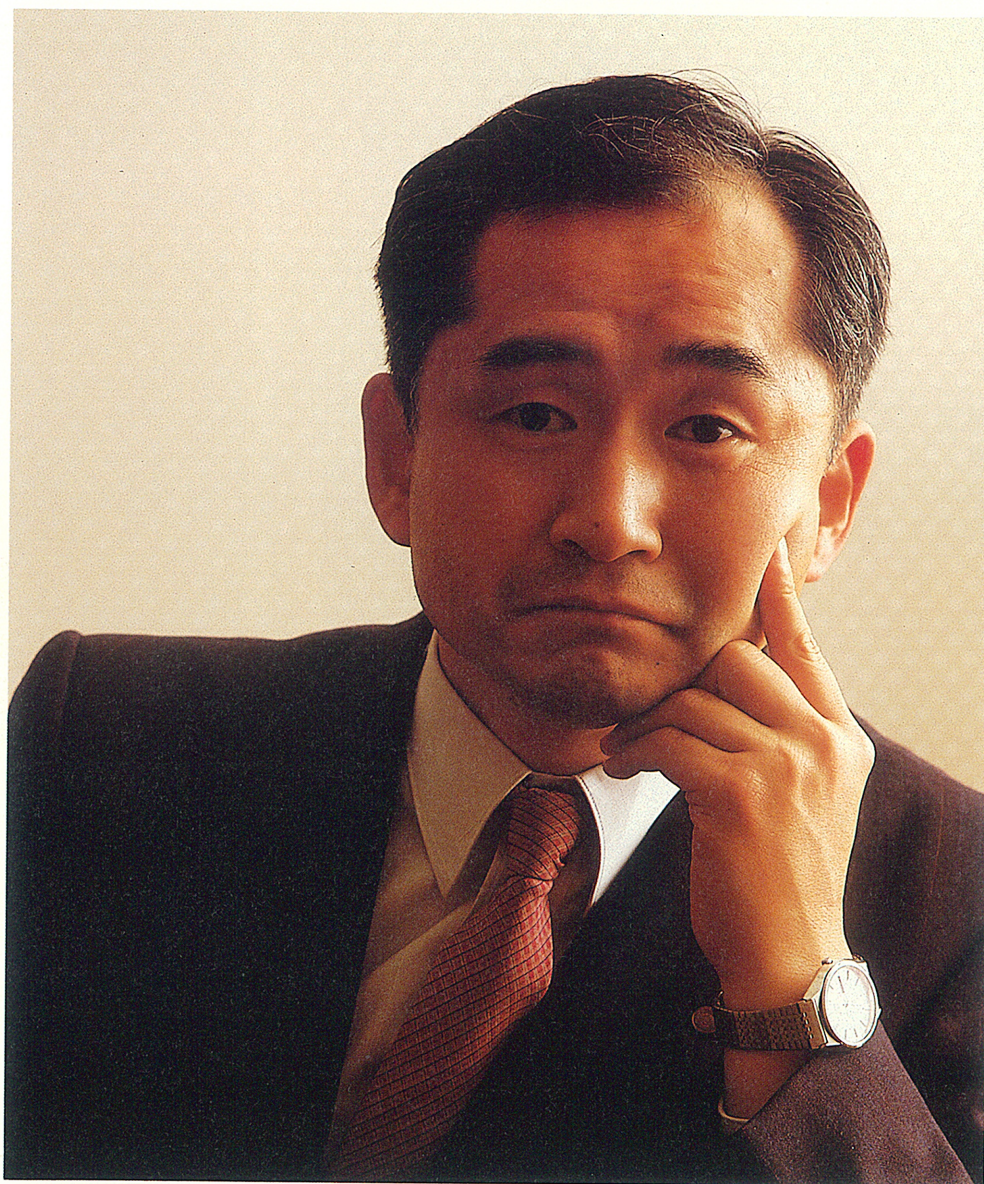
黎明の時を経て、いま私たち法学部同窓会も20周年を迎えるにいたりました。

この記念すべき時を皆様と祝うとともに、ひとつの節目として記念誌を編集いたしました。



★ LAW ALUMNI

19



龍谷大学法学部同窓会会長
田畑 健

同窓会員の皆様にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

護憲法学部を創設の目的として深草の地に昭和43年誕生いたしました。同窓会も昭和47年創立され現在会員数も約1万名を数えるまでになり、20周年という新たな意味を持つ節目を無事迎えることが出来ました。これも同窓会発展のため格別のご支援とご協力を頂いております皆様方のおかげであり厚く御礼申し上げます。

母校は輝かしい350年の歴史と伝統の上に文学部・経済学部・経営学部・法学部・社会学部・短期大学部さらに理工学部の7学部、在学生約1万2千名を有する総合大学として建学の精神にのっとり、さらに発展の一途をたどっています。その中であって法学部同窓会はわずか20年であり、やっと成人としての行動をとれるようになったばかりではありますが、母校に対しての気持ちは諸先輩方比して一



歩も遅れをとらないものであると確信しております。

今回20周年事業を行なうにあたり基本コンセプトを「350分の20の可能性」といたしました。わずか20年されど20年の気持ちを大切に、母校に縁のあるものとしての誇りをさらに深めていきたいと考えているからであります。

その記念事業の一つとして本誌を企画いたしました。作成に当っては建学の精神ならびに諸先輩方の築かれた学風が現在、また将来にわたって生かされることを期待して進めてまいりました。本誌は法学部同窓会20周年記念誌としておりますが、同窓会員のみにとられず、広く龍谷大学の卒業生、また一般の方々と共に龍谷大学の魅力を見つめ直し再認識していただくとともに、ひいては皆様方および母校の発展の一助ともなれば、これを無上の喜びとする次第であります。

最後に今後とも「350分の20の可能性」という基本理念を忘れず、建学の精神を大切にしていきたいと思っております。皆様方の今後のますますの発展をお祈りいたします。



龍谷大学学長
信楽峻磨

このたび、法学部同窓会がめでたく設立20周年を迎えられましたこと、心からお祝い申し上げます。

貴同窓会は、今日まで同窓会の発展はもとより、本学の充実、飛躍のために、常に蔭になり日向になってご尽力をいただきました。

おかげさまで、本学も同窓会の皆様から昔日の面影さえもないと、とまどわれるほどに脱皮成長し、名実ともに総合大学となることができました。これ一重に同窓会の皆様のご支援の賜物と深甚なる感謝を捧げたく存じます。

ご存知のとおり法学部は、兄弟関係で申しますならば龍谷大学の四男坊として誕生し、その利かん坊的性格を遺憾なく発揮され、常に新風を吹き込んで、兄ともいえる文学・経済・経営学部へ活力を与え、新たに弟妹となった理工・社会学部や短期大学部の成長についても、温かいまなざしで見守ってくださり、本学発展の原動力となっていております。

また同時に、自らも従来の法律学科に加えて政治学科を新設し、未来を担う政策人、国際人の育成を目指すこととなり、一層の飛躍が期待されています。

かくして、皆様の母校龍谷大学は「人間・科学・宗教」のテーマをかかげ、建学の精神を大切にしながら着実な歩みを続けております。

法学部同窓会各位におかれましても、この20周年を機縁として、この学舎でともに育てた皆様の連帯の絆を一層強められるとともに、本学を支える同窓会として、いよいよ発展いただきますよう、心から念願して祝辞いたします。

同窓会結成20周年おめでとうございます。
深草学舎で産声をあげた末子も、歴代役員と
同窓の皆さんのご尽力によって、今や立派に
成人を迎えることになりました。

私が本学に着任したのは、学部創設4年目の
1971年4月でありました。構内には、なお改造
兵舎が残り、「大学紛争」の余燼がくすぶって
おりました。……爾来20年……。学部草創期の
教授スタッフはほぼ全員が入れ替わり、構内
の様相も一変しました。「深草砂漠」にも緑な
す大木が増え、冷暖房完備のきれいな建物が
次々と建設され、大学周辺には真新しい車の
不法駐車が広がっています。

同窓会より一足早く成人式を終えた法学部
は、いま、改めてその存在意義を自ら問い直す
作業にとりかかっています。「護憲の精神」と
いう教学理念を、どのように深め、実体化して
行くべきか。教育・研究機関としての機能をよ
り強化・高度化して行くためには何を成すべ
きなのか……。ここ当分私たちの苦悩は続き
ますが、同窓の皆さんがより誇りうる学部・
大学への強力な展開を実現しなければなり
ません。

皆さま方の一層の御支援をお願いする次第
です。



第十六代法学部長
永良系二



初代法学部長
浅井清信

1992年4月7日に永眠されました。つつしんで
ご冥福をお祈りいたします。合掌



第二・三代法学部長
大阪谷公雄



第四・八・十代法学部長
小畑雄治郎

1972(昭和47)年3月、卒業式粉碎を叫ぶ全
共闘学生の実入を当時30代後半であった若
手の先生が防戦する中で、現1号館4階で卒業
式が行なわれ、それに引き続き現2号館401教
室で同窓会の発会総会が開催されました。あ
れから20年、こんなことも忘却のかなたに沈
みそうですが、その間法学部大学院の創設、
法律相談の開始、宗教法研究会・矯正課程の
開設のすべてに関係者の協力の下、学部長と
して関与する機会が与えられたことは、老境
の入り口に立つ男にとり有難いことであつた
という想いで一杯です。

同窓会にもこんなわけで心やすだてに随分
無理を申してきましたし、私たち教員が諸君
に非力ながらしてきたことが、いま諸君の努
力により各界で次々と花を開きつつあります。

今後は法学部の同窓会が閉鎖的等質集団と
してでなく、柔軟で軽快なステップを踏める
組織として一層の社会的な活躍をなさるこ
とを念じてご挨拶いたします。



同窓会の設立20周年おめでとうございます。

私が学部長であつた1972～3年は、最初の
半年間、法学部を構成する教員、職員および
学生の三者協議がまとまらず選挙ができな
かつたため、学部長代理として働きました。こ
の時期は、法学部第1期生の社会への進出、大
学院法学研究科修士課程の開設、同博士課程
の設置準備と、1969年以後の学園紛争で荒廃
した学部再建と発展にとって、とても大事
なときでありました。

わが法学部の隆盛を願って情熱を燃やした
ことが、私の心地よい思い出として、今でも
懐かしく残っております。

法学部同窓会の益々の御発展を、心からお
祈りいたします。



第五代法学部長
高林秀雄



第六代法学部長
中川祐夫

法学部同窓会発足20周年、心からお祝い申し上げます。

20周年は、いわば人生で成人式を迎えたようなもので、その歴史の一区切りとして将来を展望するよすがとなりましょう。

同窓会の諸氏の社会の各分野での活躍は、法学部の発展のあかしとして非常によろこばしいことです。

私も法学部の研究と教育にかかわり、また学部長としては、法学部草創期、学部、修士課程が完成し、更に博士課程の開設と、順調な基礎づくりの頃で、有為の人材の育成を目指すという世間の評判を得ていました。

同窓会20周年の今、法学部の評価について世間の目と、そして卒業生、同窓会員諸兄姉の厳しい批判的な目を強く感じます。母校法学部への帰属意識を大いに期待します。



第七代法学部長
木坂順一郎

法学部同窓会創立20周年、おめでとうございます。

あれから20年。ふりかえてみると、いろいろなことがありました。私が学部長として同窓会新入会員歓迎パーティーで挨拶したのは、1975年3月と翌年3月の2回でした。'75年3月は学費スライド制をとまなう「12年計画」をめくり、学生諸君と大学当局が対立状態となり、学年末試験がレポートによっておこなわれた直後のことであり、緊張して壇上に立ったことを憶えています。

今後とも同窓会が卒業生と大学をつなぐ重要なパイプ役として大きく発展されることを心からお祈りいたします。



第九代法学部長
繁田寛造

同窓会設立20周年への祝辞にかえ、学部長として学部運営に関わった2年間の中で、印象に残るものの一・二を書くこととする。

任期中に教授会で矯正課程と宗教法研究の認知を受け、基礎固めができて良かったと思っている。

しかし、組合との団交議題設定で執行部内の対立がよく見られたが、一般教育部改組についても法学部は執行部内の少数派で苦勞も多かった。火中におると、混乱時での一人ひとりの行動がよく見えて面白くもあった。2年間一応細やかではあっても学部長の権限を与えられるが、学部の意志に反して一度も行使することなく過せ、幸せであったと感謝している。

何はともあれ、同窓会20年の歴史の一割に関われて嬉しく思う。



第十一代法学部長
安武敏夫

同窓会が今年で20周年を迎えることになりました。龍谷大学が創立350周年を迎えたところですから、これに較べたら20周年とは余り自慢にもならないようですが、私はそうは思わないのです。私の学部長の時が丁度10周年記念の年でしたが、その後の10年の龍谷大学の発展は素晴らしいものがあります。なかでも法学部は、単に物理的な側面だけでなく、そのカリキュラムや教育的な面での変化に目を見張るものがありますが、私は最も大きな成長は法学部学生自身の変化だと思っています。350年かかったものをわずか20年でやり遂げたのでわなかつらうかと思う程です。可能性が現実になりつつあります。

法学部のますますの発展のために、同窓会のより一層の指導性の発揮と堅実な発展を祈っています。



第十二代法学部長
高島學司



気が付くと在職26年目になる。大学発展の象徴の一つ紫英館ができ、快適な研究室で夏冬の休暇中も仕事ができる。この上は、秀れた研究者の輩出ということになる。私の学部長就任第一声は、何より研究しよい学部、研究する学部でありたい。よき研究あってよき教育ができるの考え方は今も不易。

同窓会20周年を祝して身近な思い出を二つ。まず磯崎辰五郎先生のことである。自らに厳しく陰口や自己弁護をついぞ口にされず、研究一途。その先生から法律学全集「医事・衛生法(新版)」(有斐閣)の約半分の執筆を任せられ、一切干渉されなかった。こういう励まし方が有難かった。後進は師の後姿をみて育つとの言葉を大切にしたい。もう一つは、先年法学部一期生十数名で私の還暦を祝われたこと。感激の一面、OB諸君が馬齢を知っていたことが今もふしぎ。

法学部同窓会の20周年を心よりお喜び申します。4年前、私の学部長時代に学部20周年を迎えましたが、その折に強くそして重く感じましたことは、成人病についてでした。と申しますのは、昨今、成人を迎える時点でいわゆる成人病が原初的に発生しているという報道がなされているからです。

人間と同じように、組織もまた日々盛衰のなかに存在するものであれば、病の発生も当然のことでしょう。しかし、この病に早期に注意を向け、自己刷新を含む適切な対応をとることによって、日々新たなものとして組織も存在することになろうと考えます。これこそが人間の叡知なのでしょう。今後とも新しい一層の発展を祈念致します。



第十三代法学部長
田北亮介



私が法学部長を担当したのは、昭和63年4月からの2年間である。この時期は、あたかも学部創設20周年の行事が、私の直前の田北部長時代から継続して行なわれていた。その一つが、法学部創立20周年記念論文集(有斐閣刊)の発刊の仕事であった。

考えてみれば、わが学部は、各学会で大活躍されていた諸先輩により、人権と民主主義の精神(護憲精神)をモットーとして創設されたものであるが、それら第一世代の時代が漸く終り、第二世代の俊秀が教育と研究の直接の担手になりつつある時期でもあった。しかし同時に第二世代が日本の学会をよくリードする担手になっているかどうかは、他者による評価にゆだねなければならないが、それだけに責任の重さをひひしと感じさせられたことである。そして今や、素晴らしい若年スタッフ(第三世代)により、更なる充実と発展にとりまわれている。しかし私は、学部の時代が変遷しても、学部創設の精神が更にもみずみずしくゆきわたることを祈念するものである。



第十四代法学部長
上田勝美



第十五代法学部長
金東勲

法学部同窓会20周年おめでとうございます。350年という龍谷大学の歴史から見ると20年という歳月は短いものかも知れませんが、法学部での研究と教育に携わってきた者にとってはやはり感慨を禁じえません。その間法学部は目をみはる発展をつづけ、特に私が学部長在任中は、政治学科を新設し、21世紀の社会が必要とする人材の教育にとりくむことになりました。こうした法学部の発展は、教職員の努力と在学生諸君の理解と協力は勿論、同窓会の皆さんによる積極的な支援によるものと感謝しております。法学部同窓会の益々のご発展と法学部の教育と発展のために寄与されんことを心から祈念いたします。



元法学部事務長・
現龍谷大学企画部長
福藤需寛

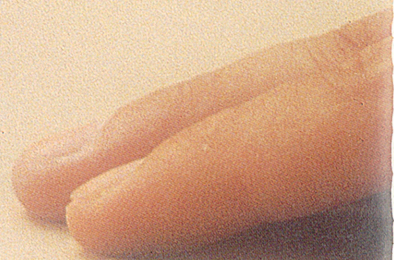
300字、この短い文字の中に私の法学部と同窓会への想いを盛り込むことはとてもできそうもない。法学部が創設され、第1回の卒業生を送り出した頃は、大学紛争の時代であった。大学財政は貧困を極め、冬のボーナスも計上できない有様。そんな中で龍大の法学部はどうあるべきか、あれこれ考えていた時代がなつかしく思い出される。いまは施設面でも整備され規模も拡大したが、苦しい時代にみられた人々の温かみのようなものは消えていくようである。龍大内部の人間関係は年とともに変化し、昔を知る者も少なくなってゆくが、同窓会はそれぞれの時代を知る者へ集団として益々固く結びあい、母校の真の発展を願い、支える組織として存在し続けて欲しいと思う。

ここに同窓会20周年を迎え、お祝いの言葉といたします。

卒業生の数だけ思い出があり、誇りがあります。

本章では、龍谷大学卒業の方々から、龍谷大学生の頃を振り返っていただき、

印象深いエピソードや忘れ得ぬ京の街の思い出を語っていただきました。







撮影/井上博道氏

一九五四年文学部卒

井上博道

大阪芸術大学教授・日本写真家協会会員



昭和26年頃、土居次義先生の、日本美術概論を受講していた。この日は校外授業で、嵯峨野、大覚寺に狩野山楽の障壁画を見学した。最後に障子の横板に描かれた兎の絵を、皆であぐらをかいて、低い姿勢で眺めながら先生の説明を聞いていた。気持ち良さそうに寝そべった兎の図、ひんやりした畳と、心地良い風、やがて誰かの寝いびきまで聞こえてきた。それでも先生の静かな口調は淀みなく続いていった。今、私は、写真で寺社の建築美や、仏像、障壁画などを撮す仕事をしている。この6月6日、校友会より、「第3回龍谷賞」を頂戴した。現代に生きる本願寺の姿をフィルムにとどめるのが、今の私の夢である。

一九七二年法学部卒

天津 信隆

(旧姓那須)

西念寺住職・あそか保育園園長



私の青春時代を育んでくれた京都。鴨川に沿った京阪電車に乗り、深草から四条まで、ドア近くの手摺りに身を任せボンヤリ川の流れを眺めながら揺られていくのが私の日課みたいなもので、大橋を渡る途中、欄干に手をやり、初夏の涼しい川風を胸一杯吸い込んだものだった。橋を渡り終えると、造りの凝った喫茶店が若い人々を待っていてくれた。紅茶がとても美味しかった「クンバルシート」、香ばしい珈琲の香りに包まれた「築地」、甘い時に酔いしれ、愛を語り、涙を流した。でも、そんな熱く燃え立った青春も、20年の月日の流れの中に静かな想い出となって、私の心にちよっぴり苦い感傷と安らぎを与えてくれる。





一九七三年法学部卒

弘中裕三
録書房



化野念仏寺——嵯峨野にあって夏の千灯供養の風景や、石塔、石仏が続く風景は独特であり、写真などの対象としてよく目にすることが多い。龍大に入学してから初めて行ったところ、写真の印象と違っていたのにおおいに驚いた。「写真はあるがまさに事実を写し取る」と、それまでは単純に思っていた私に、写真ですら写真家の構図など意図するところによって、自分自身の眼でそれを見た印象と違うことがある。言いかえれば、違った印象を他人に与えることが写真にはできる。まして文章などはと、気付き、できるならば一度は自分自身で感じ、経験をすべきことがいかに大事なことであり、自覚させられた処である。



私にも在学中の思い出は色々ありますが、お金が無くて生協の食堂を頼りにしていた事をよく思い出します。当時味噌汁が一碗5円でした。本当に金欠の時は、その味噌汁とライスだけの日々もありました。食堂のおばさんが見かねておかずを付け足してくれた事もありましたが、この頃の学生諸君の優雅な生活ぶりを見聞きすると、20年の歳月を改めて感じます。今、味噌汁の値段はいくらでしょうか。新しい食堂も出来たと聞いております。一度、生協食堂を覗いてみたいものです。

一九七三年法学部卒

山本雅紘
山人測量事務所



一九七五年法学部卒

今井康彦

長永スポーツ工業



京都を離れて、早18年が過ぎようとしている。今更ながら、ときの流れの速さを感じている次第です。京都での思い出と言えば、学生時代の出発であり、最も強烈だった円山公園です。入学時は、桜の季節ですから、先輩に連れられ、「名木——しだれ桜」を見学に、夜の円山公園に繰りだしました。そして、しだれ桜を観たのまでは覚えているのですが、それ以降の記憶がなくなってしまったのを、いまでも、なつかしく思い出します。円山公園が、明治19年、京都で最初に造られた由緒ある公園と知ったのは、東京に出てきてからのことです。



一九七七年法学部卒

山口 芳子
大阪法務局 検事



私は、それまでの生活の大半を占めていた水泳の選手生活を終え、実に自由な大学生活が始まった。龍谷大学では多くのことを学び、考えることができた。今思えば私の現在の生き方に大きな影響を与えてくれた気がする。友と語り、読書にふけていた日々のなかで、時折一人静かになりたくって、寺を巡る。そんななかで、大学の近くの石峰寺の印象が強い。人通りの少ない住宅街を歩いて行くと、寺には多くの羅漢たちがたたずんでいた。その表情は長い風雪のなかで、朽ち果てているが、そのユーモラスな表情には釣られてしまう。風が竹藪を通りすぎ、その葉音のなかで、しばし、我を忘れて時を過ごす。心が少し軽くなったところで、その寺を後にする。今も思い出すと、自然に頬笑んでしまう。



一九七九年経営学部卒

宮澤和子
ビジュアルプランナー



日本の伝統・歴史・文化が凝縮された京都の街は、日本らしさが至る所にあるような気がします。旅行研究会にいた私は、様々な所へ行きましたが、中世と近代の都市が同居しているヨーロッパを旅したとき、不思議と京都の街を思い出しました。学生時代とは京都という街の捉え方も随分変わったと思っています。現代の日本は、合理性・機能性を優先し続けた結果、街の持つ顔が失われつつあります。河原町周辺は大きく変貌しましたが、二年坂・三年坂・哲学の小道などは、今も昔の面影を残しています。景観保護が問題にされている昨今ですが、日本の顔としての京都の街の面影は、これからも変わらずにいてほしいものです。



一九八〇年文学部卒

池田 顕雄 (株) 法蔵館



ちょっとかわった野ねずみの詩人フレデリック（レオレオニの絵本の主人公）に憧れた学生時代。醍醐三宝院・小野随心院と、ほくは洛東方面に住んでいた。とりわけ懐かしいのは本願寺山科別院そばの賄い付きの下宿・森下さん。ある日のこと、夕食を見てビックリ。そこには、その日たまたま観たテレビの料理番組のメニュー、中華風冷やっこがあるではないか…。「おばさんなかなかやるねエ」。ぼくは思わず唸り声をあげたのである。



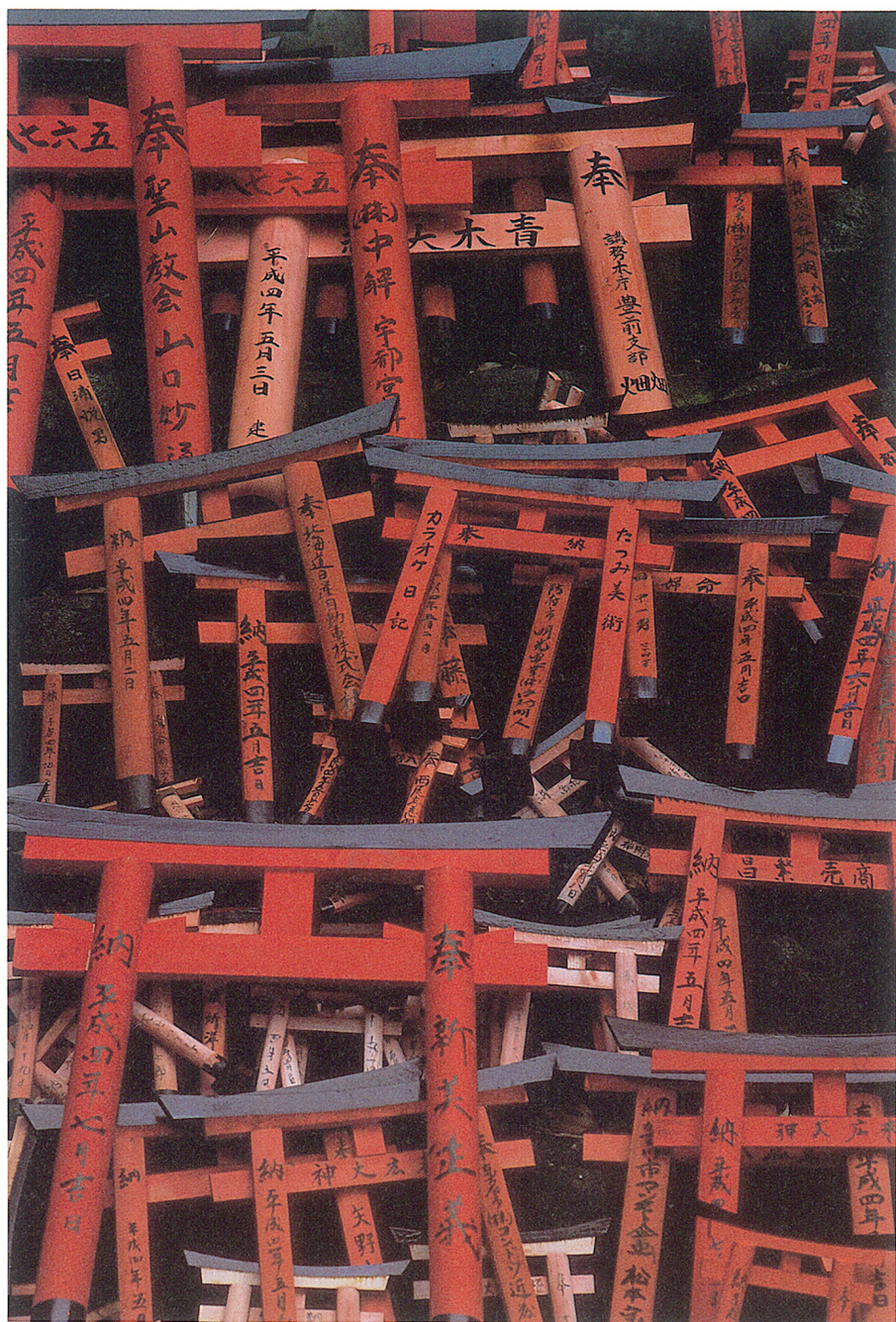


一九八〇年経済学部卒

岡田 貞信 M・O・A・I・R I N T E R N A T I O N A L



帰省する故郷ができればいいと思いつつ、今はNYに住み摩天楼の夜景の美しさ、自然の広大さに日本からの距離を感じます。また、人種差別をしたくなるような現実と、日本人キャラクターのコミカルなTV・CMを見て、自分も日本人なんだと知らされると同時に、日本人だというプライドを持つことや自分を見てもらうことで日本人とはこんな人種なんだと分かってもらいたい時、そのエッセンスはと考えると、「身を粉にしても謝すべし」なんて言葉が浮かんでくるとともに、控えめながら、一種の凜とした表情をも感じさせる千本格子の町並みを思い出します。そのことがこの頃嬉しく思うのも、また一興でしょうか。



一九八〇年文学部卒

亀山正信
高校教諭



深草学舎の近所に洋画家の桑田喜好先生が住んでおられた。先生のお手伝をさせていただいたのがご縁で、時折、お宅におじゃました。先生は名聞にはまったく興味がないといったお方で、そのお人柄にひかれて、よく絵の話聞かせてもらった。当時、先生は年に一度はパリにスケッチ旅行に出掛けられ、主に風景画を描いておられた。アトリエに日本の風景がないのを不思議に思って尋ねてみると、毎日眺めている稲荷山の風景を何度か描こうと試みたが、とうとう描けなかったとおっしゃられた。絵とはそんなものかと思った。稲荷山を見るとそのことが思い出される。その先生も先年お亡くなりになったと聞く。